

「感覚的コミュニケーション」

Kさんは俗に言う、“常時見守りが必要”なタイプ。とは言え現在は、危険が無いと思われる空間の中でならある程度の距離を持てるようになった。穏やかに過ごせる日は、スーパーで買出しの仕事をしたり、掃除をしたり、昼食後のコーヒーを一緒に楽しむことも出来る。

Kさんのコミュニケーションツールは、ジェスチャーといくつかの言葉（発声）。時にビンタも。当初はジェスチャーを読み間違え、「もう一回教えて！」とお願いすることもしばしば。的確に読み取れず突拍子も無い返答をすると、“ぼか〜ん”とした表情を向けられた。

Kさんの使うジェスチャーはどれもKさん自身が考案者で、必要と思うものをオリジナルで発信している。ご家族ですら何も教えたことはないとのこと。私たちがもっとジェスチャーを増やしたいと色々試みてみたものの、1つとして採用されなかったことは言うまでも無い。ジェスチャーにもいくつかの意味があったり、気付けばその意味が更新されていたりと、スタッフもアップデートのために情報共有が欠かせない。Kさんのジェスチャーはご家族手作りのノートに解説が書かれており、最初はそれを覚えて必死にKさんの訴えを読み取ろうとしたものだ。今ではスタッフ同士で意見を交換しながら、つたないイラストで描いたジェスチャーカードがある。まだまだ全てのジェスチャーを拾えず、日々変わるジェスチャーの意味を更新しきれていないが、夜中まで意見を交換し合って作ったジェスチャーカードにはKさんをより理解し、思いを伝え合う1つの手がかりになればという私達なりの思いが詰まっている。

Kさんとの関わりがまだ未熟だった頃は、ビンタをもらう度に彼の興奮を鎮めることばかりに意識が向いていた。眉間に皺を寄せて怒りを露わ露わにしているKさんに向かって「叩かない！」と、そんな言葉ばかりをかけていた。しかし、興奮している時のKさんを冷静に見てみると、鋭い眼差しでスタッフを見つめ何かを必死に訴えている。意味の無い興奮などでは無く、何か伝わらないことに対する怒りをぶつけているのだと気付いた時、「どうしたの？」と聞いてみた。すると「ゴハン!!」と即答。「お腹すいたの？」と聞き返すと“うん”とのこと。思い返すと、出会ったばかりの頃のKさんは空腹に耐えられず怒ってしまう日が多く、その時ばかりは好きな歌を歌われても楽しいはずもなく、苛立ちがビンタに変わることも珍しくはなかった。感受性が豊かで、環境の変化にも敏感に反応するKさんだから、気になることから意識を逸らすような言葉掛けが良いと考えがちだったが、Kさんの怒りや混乱に真っ直ぐに向き合うことこそが正しい関わり方だったのだ。

それからというもの、Kさんとは言葉のやり取りが増え、色々なことにも挑戦してみた。いつも全力で思いを伝えてくれるKさんにきちんと向き合い、ビンタが跳んでくる時にも「何がしたいのか教えて」と尋ねることを言葉にした。もちろん時間は要したが、Kさんの表現方法は怒りを表すよりも、誰かに思いを伝えようとする方法に確実に変化した。

今日に至るまで、関わる全てのスタッフがKさんのことを思い、考え、その時々それぞれ

がベストだと思う対応をしてきた。時にはこれまでの対応を変えることにためらいを感じ、時には 180 度異なる視点からのアプローチし、失敗談も少なくない。もう無理かも…とこっそり凹んだことも数知れず。でも、気持ちが通じ合ったときの笑顔には何ともいえないキラキラがあり、だから人と関わり合う仕事が好きでいられる。

K さんが様々な手段で伝えようとしている思いを見逃さず、私たちが常に同じ目線で真剣に受け止めたいと思う。まずは人として。時に支援者として、理解者として、代弁者として。厚かましくならず、決して驕らずに。K さんが地域の中で、どんな時でも愛されるあの笑顔で過ごせるようになること。それが私たちの次の課題だろう。

時々K さんがカバンの中からジェスチャーカードを取り出し、パラパラとめくっている姿がある。いつか自分の思いを伝えたい時、ジェスチャーカードの中から“コレ！”と見せてくれるような日が来ないかな…と密かに願っている。

野原 綾（ワークショップ・チボリ支援員）